

あ い さ つ

農林省農地局建設部長 小 川 泰 恵

副議長をおおせつかりながら、台風のためきょうまで参加できなかったことをお詫びします。今朝から皆様の熱心な討議を聞かせていただきましたが、その結論を私なりにまとめたものを申しあげ、ご挨拶のかわりと致します。

出口氏、木村氏から、技術援助をする場合に被援助国の要望を十分考慮した上、漸進的に行なうべきだという御意見があり、皆様もご賛同のことと存じます。一方安芸氏からは漸進的ということとは非常に結構であるが、相当スピードアップしなければ需要に追いつかないというようなお話もありました。そうすると結論として、いろいろな方法を示して相手国にその中の一つを選ばせるというような、いわゆるメニュー方式がよいのではないかと考えます。しかしいろいろな方法を示しても相手国がその内容を知らなければ選びようがないわけですから、つぎに展示方式が出てくると思います。これについては福田氏のお話のように、その中では水利的にかんがい農業も行なえるというような closed circumstance を作ってその中に Demonstration Farm なり Pilot Farm なりを作って展示する方法があります。その場合、沢田氏のいわれるようにあらゆる種類の開発要素が含まれることが望ましいわけですが、輪中方式に対してポンプによるかんがい排水ということも考えられる点ではないかと思えます。そのような場合に、少なくとも水利施設については日本としての最高度の技術を駆使して行なうことが必要でありましょう。ただ高度の技術といっても、一概に例えばライニングした水路の方が土水路よりも技術的に高度だということではなく、開発目的に合致した well balanced の技術、各部分においてオーダーの一致した技術ということではないかと考えます。

先年 ECAFE の水利開発の会議が開かれましたが、その時東南アジアの各方面から来られた発電関係の技術者の方々に、当時できたばかりの数万千瓦の最新式の発電所を見せましたところいっこうに興味を示さず、その横にあった数百キロワットあるいは数千キロワット程度の古い発電所に非常に興味を示されたということがありました。これは一例にすぎませんが、同じようなことが他の水利開発についてもいえるのではないかと思えます。

このような技術援助にともない最後に問題になるのは、開発資金の問題でありましょう。先ほど宇和川氏の申されたように、日本は資金的になかなか世界の強国に太刀打ちできるだけの経済力はないわけで、終局的にも本岡氏のお話にありましたように援助国側の特別の意図のない無償援助はありえないという意見が強いようです。したがって被援助国側からいいますと、

最終的にこのようにやってもらいたいとの意図のもとに援助を受ける場合には無償供与であってはならないということ、必ずそれは後で pay back するということを啓蒙することが必要ではないかと思えます。

最後に一言つけ加えますと、対外援助でぜひとも必要なことは技術援助で出かける方々の語学力ではないかと考えます。日本においても将来、技術援助を続けてゆくためには、若い技術者が語学の習得を十分にできるような方途を考えることがまず第一に必要なことではないかと思えます。

簡単ではございますが、ごあいさつのかわりと致します。

閉 会 の 辞

資源科学研究所理事長 安 芸 皎 一

二日間にわたり、皆様方から盛んな御討議をお願いできたことを厚く御礼申し上げます。こういう課題にはいろいろ意見があり、それぞれの分野で議論がなされていることと思えます。技術的さらには経済的協力、援助が拡大されてゆこうとする今、農林省と海外技術協力事業団と京都大学とで、こういう機会を持たれたことに心から敬意を表し、今後の御活躍を願う次第です。

私達は今、これまで経験しなかったような事態に直面し、新しい方法を投入しなければならない事情に迫られております。しかもそれは一方的な手段によっては解決がつかないということがわかってまいりました。その点で京都大学東南アジア研究センターの大学の機能を有効に使った活躍に期待するところが大きいと感じております。

このシンポジウムで提起されたものは、今後ともお互いの共通課題として皆様の御検討を期待する次第でございます。